

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月10日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16751

研究課題名(和文)日本近代写真史と近代デザイン史再構築を目的とした広告写真の先駆者 金丸重嶺の研究

研究課題名(英文) A Research on Shigene Kanamaru as a pioneer of advertising photography in Japan for the purpose of reconstructing the history of modern photography and the history of modern design.

研究代表者

鳥海 早喜 (TORIUMI, Saki)

日本大学・芸術学部・専任講師

研究者番号：20747993

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：これまで具体的な業績が明示されてこなかった金丸重嶺について調査を深め、同時代の写真家と比較調査を行い12件の展覧会を実施できたことは大きな成果であった。また、現代写真のみを研究対象とした場合、創作性が重視されがちな広告写真におけるリアリティの重要性について実例をもって示し、その点が国策宣伝としての写真の利活用につながるという説を示した。写真とデザインの関係においては、デザインは写真を内包すべき補助的な役割として認識していたが、写真分野では独自性を模索し独立することを目指し教育形態を含めて構築しようと試みていたことを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

金丸重嶺研究を深化させたことにより、とりわけ1930年代の写真界を多角的に検証し、写真史を重層的に構築することが可能となった。また、広告写真におけるリアリティの重要性及び国策宣伝との関連性を明示したことは、日本写真史において重要視されてこなかった商業的な写真の傾向が、写真史全体、延いては写真と社会の関係性において重要な位置にあることを明示しており、今後の写真史発展にとって重要な看取であると言える。加えて、近代的な写真教育の黎明期における模索を詳らかにしたことは、翻って現代の写真教育の問題的を浮き彫りにする結果となった。この発見は写真教育史を編纂し現代につなげることの重要性を示唆している。

研究成果の概要(英文)：Shigene Kanamaru has not been studied until now despite his importance for Japanese photography. This study deepened our understanding of this neglected photographer and resulted in two exhibitions.

Whereas research on contemporary advertising photography has emphasized creativity, Kanamaru's work of the 1930s stressed the importance of reality to advertising photography. This project argued that Kanamaru's emphasis on photographic reality was pivotal to its use for the promotion of public policy. As such, commercial photography, which has long been neglected in the history of Japanese photography, was central to photography's significance in Japanese society.

Another aspect of this project concerned the relationship between photography and design. Photography was considered to be part of design, but increasingly sort to define itself as its own field, especially through reforms in education. This highlights the issue of photography education and the importance of its history.

研究分野：写真史・写真表現

キーワード：金丸重嶺 新興写真 写真史 写真教育 広告写真 報道写真 ベルリンオリンピック パウハウス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、申請者が2011年以来継続してきた金丸重嶺研究(平成26年に博士論文『金丸重嶺研究-新興写真時代の活動と初期写真教育を中心に-』として発表)を発展させるものであった。金丸重嶺(1900-1977)は、日本の近代的な広告写真の礎を築いた写真家であり、新興写真を日本にいち早く導入した写真家である。新興写真とは、1920~30年代に起きたカメラの機能や感光材料の特質を活かした写真独自の表現を追求する世界的な写真表現の潮流を指すものである。

金丸は、広告写真や報道写真を代表とする商業写真分野の台頭や、写真教育の発展において多大なる貢献をしているが、これまで具体的な調査研究及び発表は成されてこなかった。学術的な研究は申請者による博士論文が初めてのものであった。

このような現状に対して、金丸の写真家としての活動を分析し広く公開することが、写真界及び他の近接する表現分野史に対して新たな視座を加えると考え本研究を開始した。

## 2. 研究の目的

### (1) 日本近代写真史再構築を目的とした金丸重嶺による写真家活動の分析と周知

広告写真は現代における代表的な職業写真の分野である。それにも関わらず、起源や成り立ち、特に社会的背景との相互関係については十分に研究が成されていないと言える。金丸は1926年に日本初の商業写真専門スタジオを開設し、その分野を牽引し、戦後においては商業写真家の育成に努めた人物である。また、満州やベルリンオリンピックの取材なども行っており、報道写真の発展にも関わっている。金丸の活動を詳らかにし商業写真の成り立ちや報道写真の展開を紐解くことで、より重層的に時代を読み解き、結果として日本近代写真史を再構築することを目的とした。具体的に以下2点の達成を目標とした。

年代順に分類していた金丸の写真をジャンル毎に再分類し、対応する分野の既存史と比較しながら日本近代写真史の再構築を試みる。研究成果は展覧会という形式で発表する。

金丸と同時代の写真家である名取洋之助の研究者である白山眞理氏の協力を得て、金丸と名取洋之助との比較調査を行う。成果発表として展覧会を開催する。

### (2) デザイン史に対する新たな視座の発掘

金丸は写真界だけでなく他の表現分野との関わりも深く、特に職業的にも共同作業をすることの多いデザイン業界とのつながりは密接なものであった。日本商業美術の先駆者杉浦非水とは早くから親交があり、杉浦が主宰する商業美術同人会「七人社」において他のデザイナーとも交友を深めた。金丸の影響力は次第に増し、「金丸の紹介で企業の宣伝部にデザイナーとして入社できた」という者もいたほどである。太田英茂、山脇巖らとも仕事を越えて交流しており、金丸の写真家としての仕事を詳らかにすることによって、近代デザインの変遷や仕事の有り様において新たな視座をもたらすことを本研究の目的の一つとした。具体的には以下2点を行う。

近代デザイン史を体系的に理解し、その中に金丸の存在を組み込むことを試みる。

そのうえで、金丸の果たした役割を分析することで、当時における写真とデザインの強い関係性について考察する。

## 3. 研究の方法

### (1) 平成28年度

すでにアーカイブ化した約2,500点のオリジナルプリントや300点に及ぶフィルムといった写真資料の再分類及び調査を行う。

金丸の活動のみではなく、既存の日本写真史(『日本写真全集12』小学館1988掲載「日本写真年表」など)と比較し、金丸の写真家活動を組み込みながら日本写真史の再構築を行う。研究成果は、展覧会として発表する。

### (2) 平成29年度

#### ベルリン現地調査

金丸の写真家活動にとって非常に重要であると推察され、尚且つフィルムが現存していながらも、被写体が不明なものも多く調査が深められていなかった1936年ベルリンオリンピック取材に関する調査を発展させるため、主要撮影地であったベルリン現地調査を行う。名取洋之助との比較調査

白山眞理氏の協力を得て1936年のベルリンオリンピック取材を中心とした渡欧時に撮影された写真について比較調査を行う。これにより彼らの写真表現や理念の相違を明らかに

していく。併せて両者の写真が日本国内でどのように受容されたかについても考察する。商業美術同人会「七人社」による雑誌『アフィッシュ』(1927～1933 刊行)の調査を行い、如何にデザインと写真が強く影響を与え合っていたかを考察する。これにより、日本近代写真史と近代デザイン史を相関させた新たな近代的表現分野史の土台構成を試みる。

### (3)平成 30 年度

前年度成果報告として JCI フォトサロンにおいて展覧会を開催する。展覧会に関連してシンポジウムを実施する。

本研究の総括として金丸の写真家として果たした役割を明示し、それによって如何に日本近代写真史が再構築出来たかを検討する。この時点で再構築出来た部分や不十分である要素を列挙し今後の研究課題を明確にする。

日本近代写真史と近代デザイン史の融合に関しては、前例のない表現分野史の構築であるため、融合点や接点などを具体的に示し、個人の研究としてだけではなく今後広く周知し、さまざまな見地から考察を加えることが可能になるように土台を完成させる。

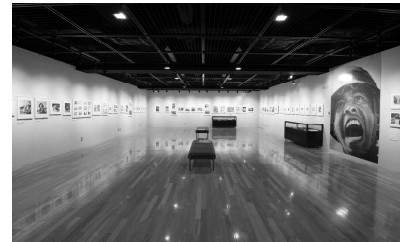
## 4. 研究成果

### (1)平成 28 年度

約 2,800 点の写真資料の再分類及び調査を行った。本調査により資料は「東京 1920 年代」「金鈴社」「P.C.L」「満州 1933 年」「ベルリンオリンピック 1936 年」「欧州風景 1936 年」「武漢進攻作戦 1938 年」「国策宣伝」の 8 つに分類した。これらは時代順と併せて写真作品の傾向による分類である。

金丸の写真は、初期作品は同時代の流行であったピクトリアル写真であるが、1920 年代後半からは新興写真らしい斜め構図やデザインに凝った写真表現などが増加していく。「金鈴社」に分類した広告写真は、無論のことデザイン性が高い傾向にあるが、併せて写真におけるリアリティの効果的な活用も特徴として挙げる事ができる。この「写真におけるリアリティ」に対する比重は時代を追うごとに増し、「満州」以降、リアリティのある写真表現へと金丸の写真は展開していく、ということが本調査により明らかになった。

本調査結果は、2017 年 2 月 18 日(土)～3 月 3 日(金)に日本大学芸術学部芸術資料館にて「没後 40 年記念展覧会 写真家金丸重嶺 新興写真の時代 1926-1945」として発表した。これは、金丸の一周忌に日本大学芸術学部で開催された「金丸重嶺追悼展」(1978)以来、約 40 年ぶりの展覧会であり、学術的な研究の成果発表としては初めてのものとなった。



展覧会場の様子

本展覧会では既存資料に加えて、戦前に撮影された金丸のオリジナルネガからニュープリント(銀塩写真)を制作し公開した。多くの資料が初公開であった。プリントと当時の刊行物を公開することで、トリミングや加工を経て発表されることの多い広告写真を写真単体で鑑賞し、金丸の視点を明確にする意図があった。一方で、成果物と併せて展示することでデザインやテキストといった他の表現分野との融合による表現効果の拡大をより明確に示す目的もあった。

展覧会と併せて『FONS ET ORIGO Vol. XX, No. 1 Spring 2017 没後 40 年記念 写真家金丸重嶺 新興写真の時代 1926-1945』を申請者の企画編集で発行した(2017.2.18 日本大学芸術学部写真学科発行)。展覧会を開催したことにより、卒業生から金丸に関する有益な情報を得られたことや、写真史研究者や 1920～30 年代の文化史や映画史などの研究者と新たな交流をもつことが出来たことは、今後の研究発展において大きな収穫であった。

### (2)平成 29 年度

主として 1936 年のベルリンオリンピック取材を目的とした半年間の渡欧期間に撮影された写真に関する調査を行った。具体的にはネガフィルム、写真アルバム、日記といった実資料調査、及びベルリンにおける現地調査などを行った。本調査により、この渡欧が以後の金丸にとって大きな契機となったことが明らかとなった。特筆すべきは以下の 3 点である。

1 点目は、金丸の報道写真家としての起点となったことである。オリンピック取材においては、広告写真制作とは異なり、迅速かつ臨機応変に制作にしている。金丸はその後、日中戦争で従軍取材を行うなど報道写真家としても活動している。2 点目は、日本における広告写真の質向上と普及活動の必要性に関する確信である。金丸はヨーロッパにおいて、広告写真の質の高さと豊かさを目の当たりにし、日本の当該分野の底上げの必要性を痛感した。これを機に金

丸は、教育活動や広告写真に関する社会活動に邁進することになる。そして、3点目は写真を活用した大型広告に対する認知である。ヨーロッパで写真を用いた大型広告(写真壁画)やショーウィンドウを多見した金丸は、帰国後、撮影活動だけではなく、国策宣伝としての展覧会の企画・制作などに取り組んでいる。これらの仕事は期せずして戦意高揚のための写真壁画「撃ちてし止まむ」制作へと昇華された。

本調査の上で、同オリンピックを撮影していた日本人写真家名取洋之助との比較調査を白山眞里氏の協力を得て行った。これにより、双方の撮影目的や制作傾向の相違を考察することができた。一例としては、名取の写真は非常に計算して撮影されており、密着プリント(フィルムを撮影順のまま印画紙にプリントしたもの)を確認しても無駄がなく、グラフィジャーナリストとしての効率的な撮影計画と職業意識が看守できた。対して金丸は、初めての海外であることもあり、新奇なものを見尋るたびにシャッターをきったと思われるような好奇心の強い観察的な視点の写真が多い。またショーウィンドウを撮影していることも多く、広告写真家としての学習意欲が強く感じられる。構成的な写真も非常に多く、スナップや報道の中にも広告的もしくはデザイン的な要素が散見された。両者の撮影時期や場所は同様であったが、名取はグラフィジャーナリストという職業者として、金丸は広告写真家としての立ち位置から撮影をしていたことが明白となった。本調査結果は、次年度に展覧会「金丸重嶺 vs 名取洋之助 ベルリンオリンピック写真合戦 1936」(平成 30 年 6 月 5 日～7 月 1 日 JCI フォトサロン)として発表した。

近代デザイン史と日本近代写真史の融合を目的とした調査に関しては、雑誌『アフィッシュ』の熟読調査を行った。商業美術同人会七人社が発行元である『アフィッシュ』は 1927 年に創刊されたが途中休刊し、1929 年 10 月号から再刊している。写真に関する記事が登場するのは、1929 年の再刊からである。この時、写真の専門家として記事を執筆したのが同人でもあった金丸である。『アフィッシュ』における写真関連の記事は全て金丸が執筆しており、七人社の展覧会においても写真を展示しているのは金丸のみである。あくまで七人社は、図案を主要研究対象と考えていたため多くの写真家を所属させる必要は無かったためと言えるが、換言すると、図案のスペシャリスト達にとって金丸は写真のプロフェッショナルとして認め得る存在であったわけである。

ここで特筆すべきは、七人社のメンバーで結成された「工芸科学研究所」の存在である。1930 年 2 月号には工芸科学研究所が主催となり夜間実習生を募集しており、そこで「図案実習生」と「光画実習生」が募集されている。ここからは、七人社において広告分野の発展のためには図案つまりデザインと、光画つまり写真の力で必要であると理解されていたと推察することが出来るのである。これは、金丸と七人社の図案家という小さな世界での話ではなく、当時の写真とデザインの関係性を示す有り様ということが出来るのではないだろうか。

しかしながら、七人社と『アフィッシュ』からのみ関係性を読み解くことは、困難かつ狭義的であるため、より多くの写真とデザインが共存した団体や組織について調査することが必要である。この点は今後の課題である。

### (3)平成 30 年度

最終年度は、研究成果発表として以下 2 件を遂行した。

1 点目は、金丸と名取洋之助の比較調査の成果報告としての白山眞理氏との合同企画展覧会「金丸重嶺 vs 名取洋之助オリンピック写真合戦 1936」(2018.6.5～7.1 JCI フォトサロン)である。比較展示を行ったことによりデザインと写真領域を往来していた金丸のデザイン性豊かな写真傾向と、ジャーナリストとして洗練された名取の作風を明示することが出来た。また、当時のドイツの景観や文化などについても提示した。



展覧会場の様子

2 点目として写真史とデザイン史の関係性に関しては、日本写真芸術学会誌に論文「日本大学専門部芸術科写真科とパウハウスに関する一考察」を発表した。ここでは写真教育における主点設定の困難さを指摘した。パウハウスにおいては建築を目指すべき主点として位置付けてカリキュラムが設定されていた。しかし、写真教育においては写真が包括する役割や意味が多様であり、ひとつの主点に向かってカリキュラムを組むことが難しく、写真教育独自の方法論が必要であるという結論を得た。本論文は、教育という観点から写真史とデザイン史の関係について考察する内容であった。今後はより商業的な視点から両史を研究していく予定である。

また、研究計画には含んでいなかったが、これまでの調査研究を行う中で、写真史を現代まで分断せずに考察を行うためには金丸の戦時中及び戦後期における活動の詳細を調査する必要があるため、未整理であった戦時中及び戦後の金丸重嶺資料についても調査を進めた。本調査研究は今後も継続していく。

#### (4)総括

本調査研究によって、特に以下3点について明らかにすることが出来た。

まずは、広告表現における写真のリアリティの重要性である。現代の広告写真のみを研究対象とした場合、リアリティよりも創作性や表現性が重視されがちである。しかしながら、1930年代の広告写真表現において金丸はリアリティを重要視していたのである。それまでの広告写真は、どのような商品であっても着飾った女性が商品を片手に微笑むというものであったが、金丸が牽引した広告写真は、工場の様子や、そこで勤務する作業員、力強く汗を流して働く様子といったリアリティが際立っている。また、リアリティに長けていたからこそ、広告写真は戦時中の国策宣伝として大いに活用される結果を招いたと換言することもできる。単にインパクトがあり人々の注目を集めるという意味における広告表現ではなく、リアリティを多大に含む表現があったからこそ、広告写真は国策宣伝へとつながっていったのである。

これは、日本写真史において従来重要視されてこなかった広告写真や商業的な写真の傾向や存在が、写真史全体延いては写真と社会の関係性において非常に重要な位置にあることを明示しており、今後の写真史発展にとって重要な看取である。

2点目としては、写真とデザインの深い関連性と各分野から見た場合の齟齬が挙げられる。本研究では特に、金丸と七人社の関係性及び日本大学専門部芸術科写真科とパウハウスについて考察を行った。いずれにおいてもデザイン側から見た場合は、写真は商業美術や建築といったデザインに内包される補助的な役割として存在していた。無論、その分野における重要度は非常に高く認識されていたものの独立した表現分野としての認識は低かったということが出来る。それに対して、写真分野においては、写真表現の独自性を模索し独立することを目指していたと言える。そのために、金丸は写真でしか出来ない表現を七人社機関誌『アフィッシュ』でも訴えた。また、デザインに包括される写真ではなく、あくまで写真単体の教育機関としての日本大学専門部芸術科写真科においては、多様な可能性を含む写真の如何なる部分を教育の核とすべきかを模索し、1つの核をもつのではなく、その多様性を受け入れ、あらゆる可能性を探求する研究形態を採用したことを指摘した。

写真教育の黎明期であった当時におけるこの判断は、その可能性を拡大させるためには的確な判断であったと考えることが出来る。これに関する問題点については後述する。

3点目は、同時代における写真家を丁寧に比較調査することの重要性である。従来の写真家研究では、対象となる写真家に対して深く調査される傾向が強い。無論、個人に対する考察の深化は重要である。しかしながら、得てして写真家は創作活動などに対して多くを語らない傾向にあり、個人のみを調査しているとその特徴や真意が見えづらくなることが多い。しかし、本研究においては、同時代に多くの場面で近接して写真家活動を行っていた金丸と名取洋之助を比較研究したにより、それぞれの高い職業意識や表現の特性を詳らかにすることが出来た。

金丸は、生涯に渡って多くの写真家、写真関係者、デザイナー、さまざまな分野の表現者と交流を深めている。そのため、比較調査出来る対象は非常に多く、その関係性を丁寧に考察することは、写真とデザイン、写真と社会の関係性について明示することにつながると言えるのである。

#### (5)今後の研究課題

金丸研究を行うことによって日本初期における広告写真の発展と成り立ちを詳らかにしてきたが、今後は戦時中を経て、現在までどのように広告写真が進展していくのかを明らかにしていきたい。これは本調査研究の目的である日本写真史の再構築に非常に重要な課題である。また、広告表現に欠かせないデザインとの関係性を常に意識しながら研究を進めたい。

写真教育については、日本における近代的な写真教育の黎明期である1930年代において、写真の可能性を重要視し、多様性を受け入れ、あらゆる可能性を探求する研究形態が採用されたことを指摘した。また、これにより写真教育機関では現代も脈々と同様の考えが引き継がれていることに対する懸念を浮き彫りになった。

近代的な写真教育の黎明期から既に約80年が経過しようとしているのである。時代や社会は大きく変わり、写真も技術や表現、他分野の関連性といったあらゆる分野において変化を遂げ

ている。写真は技術革新や簡易化が進み、遠心的に活躍の場面を増やしているが、それに伴い、写真家や写真の専門家に求められる仕事や役割も変化している。このような時代において写真教育現場が教育の核を1つとしていないことは、写真の在り方を不安定にならしめるとも換言出来る。今後は、写真教育の変遷を辿りながら写真教育史の形成を試み、現代において、もしくは未来において必要な写真教育の在り方を考えていきたい。

本研究期間内にも、デザインや映画といった表現分野における1920年代～1930年代の研究成果が多く発表された。1930年代の写真を取り巻く環境は、デザインや映画といった近代的な表現分野と非常に近接しており他分野の研究発展から受ける影響も大きい。

申請者は、写真史研究という立ち位置から今後もこの時代について考察し、写真やデザイン、映画といった近代的な表現に関わる分野の成り立ちについて、分断することなく、むしろ横断するように再構築するための橋渡しとなっていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

鳥海 早喜、「日本大学専門部芸術科写真科とパウハウスに関する一考察」、『日本写真芸術学会誌』、査読有、第27巻第1号、2018、27～37頁

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

白山真理・鳥海早喜・櫻井由理(編著)、『金丸重嶺 vs 名取洋之助 -オリンピック写真合戦1936』、JCII フォトサロン、2018、全32頁

鳥海 早喜・高橋 則英(編著)、『FONS ET ORIGO Vol. XX, No.1 Spring 2017 没後40年記念写真家金丸重嶺 新興写真の時代1926-1945』、日本大学芸術学部写真学科、2017、全64頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

<シンポジウム発表>鳥海 早喜、「金丸重嶺・国策としての写真活動 -『アサヒカメラ』に

おける南進に関する記事を中心に-」、シンポジウム「20世紀前半における日本の「南進」メディアと日本人社会」、日本大学芸術学部江古田校舎西棟3階W-302、2019.3.1

展覧会企画構成、白山 真理、鳥海 早喜、「金丸重嶺 vs 名取洋之助 -オリンピック写真合戦1936』、JCII フォトサロン、2018.6.5～7.1

展覧会企画構成、鳥海 早喜、没後40年記念展覧会「写真家 金丸重嶺 新興写真の時代1926-1945』、日本大学芸術学部芸術資料館、2017.2.18～3.3

## 6. 研究組織

(1)研究分担者：なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：白山 真理

ローマ字氏名：SHIRAYAMA, Mari

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。